

たまな発掘速報展 2026

—ふるさと玉名のモノがたい—

展示案内ガイド



2026

玉名市教育委員会

ごあいさつ

私たちの足もとには、ふるさと玉名悠久の歴史が眠っています。「遺跡」という大地の記憶、かつて人々が手にしたであろう「遺物」は、私たちにいにしへの営みを静かに語りかけてくれます。

本市では、様々な開発工事に先立つ発掘調査を行い、その成果を広く伝えるため、平成16年度から発掘速報展を開催してまいりました。

11回目の開催となる本展では、近年の発掘調査による出土品や研究成果を通して明らかになった「玉名の歴史」を紹介します。あわせて、認定10周年を迎えた「菊池川流域日本遺産」の関連展示も行います。

「モノ」たちが語るふるさとの物語を、どうぞ感じ取ってください。結びに、本展の開催にあたりご指導、ご協力を賜りました皆様に、心より御礼申し上げます。

令和8年9月 玉名市教育委員会



凡 例

1. 本展示ガイドは、玉名市立歴史博物館ころもピアで開催する令和8年度特集展示「第11回たまな発掘速報展」（期間：令和8年9月5日～10月18日）の概要版図録として作成した。
2. 展示資料は、主に令和4年～7年度に発掘調査したものを中心としており、過去の未公開資料などはトピック展示としている。写真や図面は、玉名市教育委員会が撮影・作成し所蔵するものである。
3. ここに掲載したものは、展示の概要を示す一部のものであり、展示資料のすべてではない。また、展示構成と内容が異なる部分もある。
4. 本展示は、文化課文化財係の齋父雅史・田熊秀幸、博物館係の緒方俊輔・高田悠人が担当した。
5. 本解説書の編集執筆は、齋父が行った。

※表紙の写真は、山田中嶋遺跡で甕棺を取り上げた直後に撮影したもの。

狩猟・採集－山と川と海の恵み

たまなの旧石器・縄文時代

玉名にはいつ頃からヒトが住み始めたのでしょうか。旧石器時代の遺構はまだ発見されていないため、よくわかりませんが、1万年以上前の石器が出土した遺跡は数か所あります。これまで、寺田や山田・築地において尖頭器や台形様石器などが出土しており、野山をかけめぐり、狩猟をしていたことが想像されます。

土器が使用されるようになると縄文時代に入り、海岸沿いには貝塚が多くつくられていきます。縄文時代の集落全体が発掘されている例は多くありませんが、これまで寺田の吉丸西遺跡において、後期から晩期にかけての円形竪穴建物跡が36基検出されており、いくつかのグループに分かれて生活していたことがわかっています。

近年、玉名平野遺跡群における熊本県の調査区で、縄文時代晩期の竪穴建物跡と黒川式土器が出土しています。その他、岱明町の目倉尾遺跡において、縄文時代後期の磨消縄文を施した鉢、大原遺跡で中期の阿高式土器などが出土しています。石匙は、動物の毛皮を剥ぐための道具で、通常は三角形に近い形状をしています。山田中嶋遺跡の石匙は、珍しく円形であることから用途が異なっていたかもしれません。



旧石器時代の尖頭器・台形様石器
(吉丸前遺跡・築地館跡)

縄文土器
(菊池川床遺跡)



縄文時代後期の鉢形土器(目倉尾遺跡)



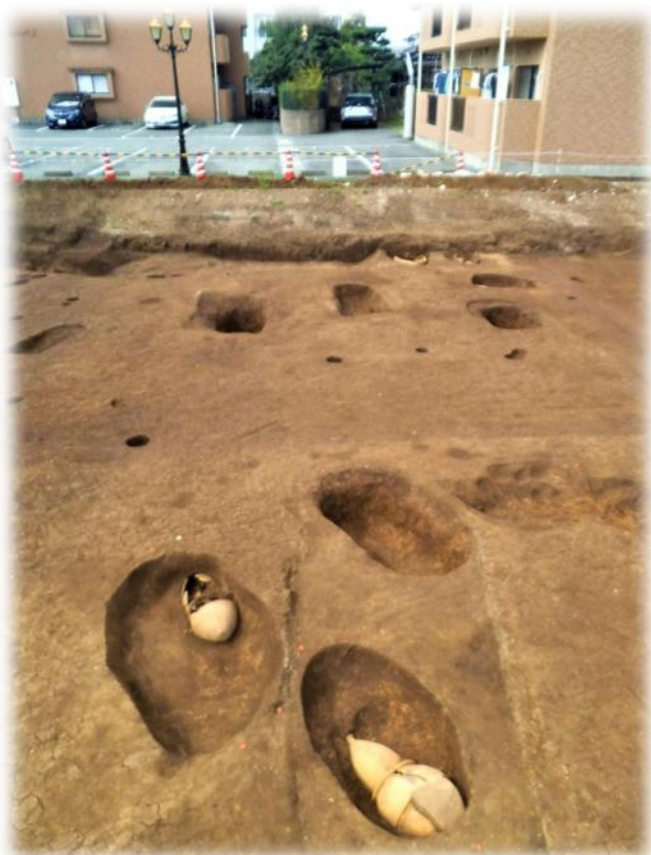
石鏃と石匙状石器(山田中嶋遺跡)



甕棺の盛衰と交易

たまなの弥生時代

弥生時代になると稲作が開始され、丘陵上には小集落がつくられていきました。特に中期から後期にかけては市内でも人口が増加したとみられ、多くの遺跡が確認されています。また、集落の近くには墓地がつくられますが、様々なお墓の形態がありました。中でも、九州西北部を中心とする墓制である甕棺（甕の中に遺体を納める墓）は、市内において最も多く用いられたようです。甕棺は徐々に大型化していき、集団墓地が形成されました。後期になると木棺墓や箱式石棺墓が登場してきて、市内では甕棺が衰退していきます。そして、年の神遺跡や大原遺跡などからは各地域との交易の証しといえる文物も出土しており、大規模集落へと発展していきます。



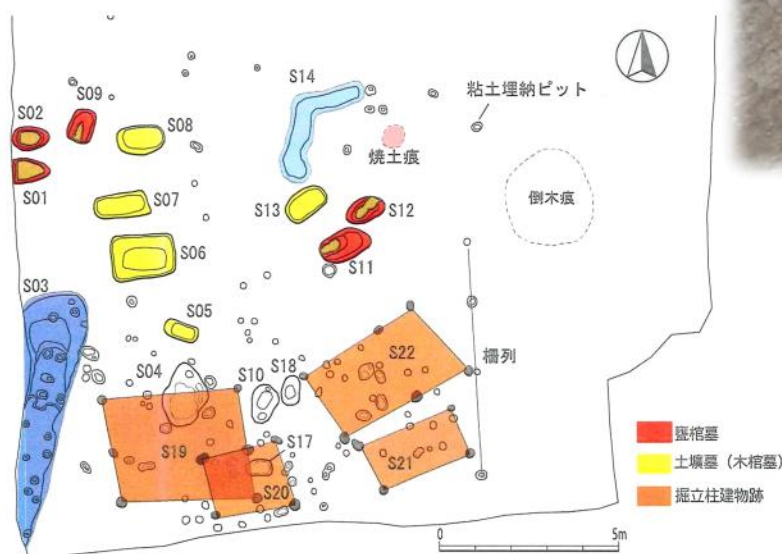
土墳墓と甕棺墓群の出土状況

南出遺跡

台地上の市街地に位置する弥生時代中期の集落跡です。令和5年度、店舗建設に伴い発掘調査を実施したところ、甕棺墓が5基、土墳墓が5基検出されました。墓の配置や方向から、3つのグループに分かれて埋葬されていたと考えられます。甕の形式は、在地系の黒髪式のほか、佐賀平野などにみられる桜馬場式や三津式も混在する状況でした。甕棺墓の南側には、柱穴が多く見つかり、数棟の掘立柱建物があったと考えられます。また、西側隣接地では、以前の調査で住居跡が検出されていることから、西側が居住域とみられます。



甕棺墓群の出土状況



南出遺跡の遺構配置図



南出遺跡出土の甕棺



甕棺の検出状況



甕棺群の検出状況



大型甕棺の出土状況

山田中嶋遺跡（Ⅰ区）

境川左岸の低丘陵上に位置しています。令和4年度、宅地造成に伴い発掘調査を実施したところ、甕棺墓14基、木棺墓1基、箱式石棺墓1基が発見されました。

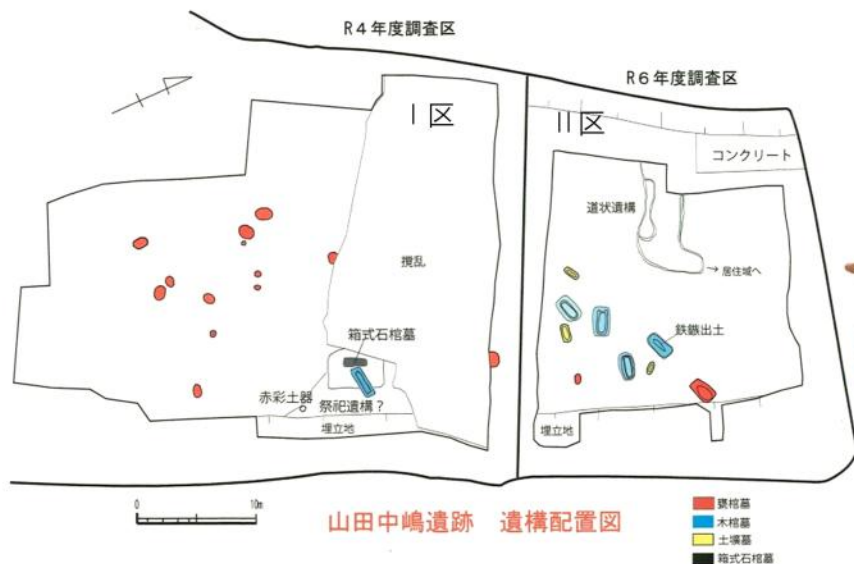
小型甕棺は、同じ形の甕を合口にしたものが多く、大型棺は単棺が主で、石や板で蓋をしたとみられます。

調査区の東端には、祭祀的な痕跡があり、赤く塗られた高坏や鉢が出土しています。隣接するⅡ区の状況からも、墓域の中心となる丘陵の東側では、埋葬に伴う葬送儀礼が行われていたものと考えられます。甕棺は南出遺跡と異なり、在地系の甕はほとんどありませんでした。また、木棺墓や土壌墓も分布しており、墓種ごとにエリが分かれていたようです。最終的に、弥生時代後期以降には箱式石棺墓がつくられるようになります。

箱式石棺は、安山岩の板石を組み合わせたもので、副葬品はありませんでしたが、北側に頭骨の一部が残存しており、石鏃が1点検出されています。



箱式石棺墓の出土状況(上:棺蓋検出時)



山田中嶋遺跡 遺構配置図



小形甕棺の出土状況



祭祀用の丹塗磨研土器

山田中嶋遺跡(Ⅱ区)

Ⅱ区も宅地造成に伴い、令和6年度に発掘調査を実施しました。Ⅱ区は甕棺墓が2基と少なく、木棺墓が4基検出されました。これに小形の土壌墓も3基あり、多種多様な墓制が時代ごとに分かれて配置されていたようです。

全体でみると、弥生時代中期は、丘陵に沿って東西方向へ甕棺墓群が形成されました。後期になると、北側に木棺墓と土壌墓のエリアができてきます。そして後期から終末期になると箱式石棺墓がつくられ、甕棺の終焉が訪れたようです。木棺墓の木材は残存していませんでしたが、棺を収める段状の落ち込みが確認でき、1基からは鉄鏃が検出されました。この他、甕棺内から石鏃が1点検出されています。なお、Ⅰ・Ⅱ区の北側には玉名バイパス建設に伴い、熊本県によって調査された「山田松尾平遺跡」があります。ここでは、弥生時代中期から後期の住居跡が多数検出されていることから、この集落の人々の墓地であった可能性があります。



木棺墓と土壌墓群の検出状況



出土した石鏃と鉄鏃
(左:甕棺墓、右:木棺墓内)



木棺墓の出土状況



甕棺墓の出土状況

トピック展示

生々しい戦いの痕跡？

東南大門遺跡は築地の境川右岸丘陵上に位置しており、弥生時代中期の甕棺墓が42基も出土しています。このうち、30号甕棺からは、5点もの磨製石剣の切先が検出されています。弥生時代の戦いや武器を研究している荒田敬介氏(神戸市学芸員)による近年の調査によって、石剣の2点には人体の脂肪分や血痕などによる黒ずみ残り、折れ方のパターンから、数人によって刺した際に生じる痕跡である可能性が指摘されました。数人が相手をするということは、このムラで最も強い兵士やリーダー的な人物だったのかもしれません。



東南大門遺跡の磨製石剣と黒ずみ痕

高岡原遺跡

境川左岸の丘陵上に位置する、弥生時代後期から古墳時代初頭を中心とした集落跡です。市内では最も多くの発掘調査例があり、これまで100基近い住居跡や中国(後漢)製の鏡片、国内製の鏡、鉄斧などが出土し、大規模な集落であったと考えられています。また、これまで「いっちょう畑石棺」といわれ、安山岩の板石が露出していた部分があり、令和7年度の宅地造成に伴い調査したところ、大きな箱式石棺であることが判明しました。幅約1m、長さは約2.5mあったと推定され、石材には線刻画が確認されました。多くの斜線を交差させたり、舟のような図柄も確認できます。後世の攪乱を受けていますが、その規模などから首長墓であった可能性があります。令和4年度の調査地では、弥生時代後期の住居跡7基が検出されています。



箱式石棺墓の出土状況(矢印部分に線刻)



箱式石棺墓の平面図



◀石棺石材の線刻画(オルソ画像)

小口部分の石材の内側に細い線刻が確認できました。斜めに交差する部分は、網や川の流れるように見え、左下は舟か魚のような図柄にも見えます。また、赤色顔料も一部残存していました。

市内では、大原箱式石棺群の一部に、星や舟とみられる線刻が確認されています。



住居跡群と出土した弥生土器



年の神遺跡

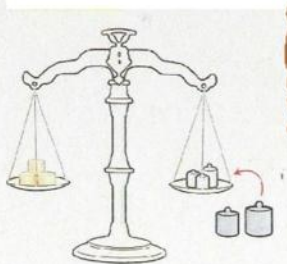
有明海沿岸に近い台地上に位置する、弥生時代中期を中心とした集落跡です。これまでの調査で、支石墓の主体部である甕棺内から、南海産のゴホウラ貝製腕輪が7点も出土しています。その他、銅矛片や立岩産の石包丁、今山産の石斧、須玖式の丹塗磨研土器などが出土しており、各地域との交易を行っていたことがわかっています。さらに近年、「石権」とよばれる石製のおもりが県内で初めて出土しました。これは、計量にもちいる分銅となるもので、天秤に吊り下げて重さを量ったと考えられています。天秤権は、俵形に面取りされているのが特徴で、福岡県春日市の須玖岡本遺跡など全国で数例しか発見されていません。武末純一氏(福岡大学名誉教授)によると、銅やベンガラなど交易品を計量していたのではと推測されています。



県内初出土の石権



古代中国における計量



天秤計量の模式図



丹塗磨研土器

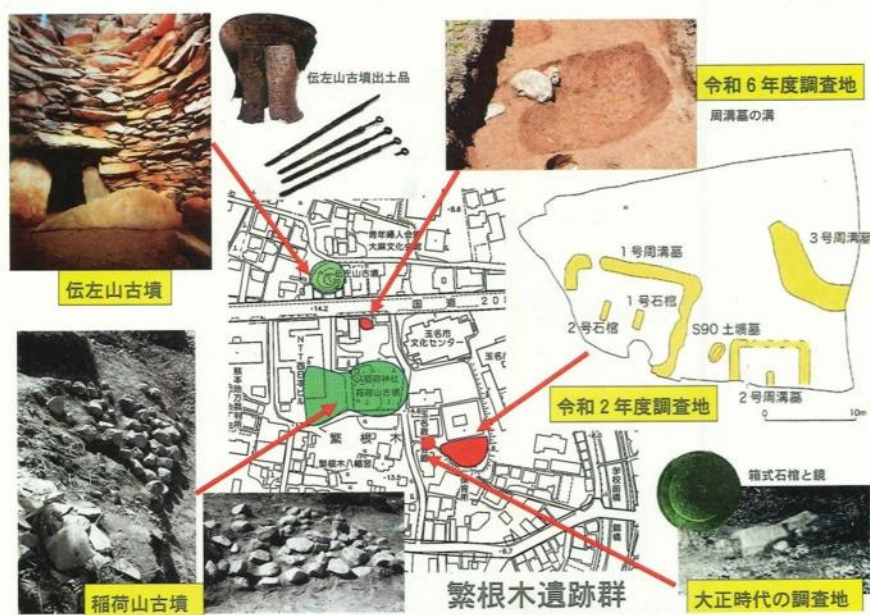
古墳と有力者の出現

たまなの古墳時代

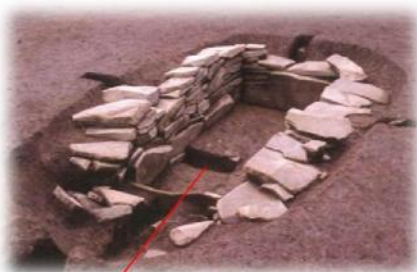
繁根木遺跡群

繁根木川右岸の台地上に位置しており、県内最大級の前方後円墳である稲荷山古墳、多くの副葬品が出土した伝左山古墳が所在しています。近年の調査で、これらを中心に箱式石棺や周溝墓が分布する古墳群が形成されていたことがわかってきました。

令和6年度の調査区でも、周溝墓の一部とみられる溝が検出され、葺石の可能性がる安山岩礫石も出土しています。



周溝墓とみられる溝と葺石



塚原遺跡の円墳石室



石棺系石室内から出土した副葬品

トピック展示

塚原遺跡の古墳群

ひまわり町野口に所在する遺跡で、市道建設に伴い、平成22～24年度にかけて発掘調査を行っています。この南端において、古墳時代中期の円墳が6基確認されました。主体部は石棺系石室といわれる北部九州を中心に分布する石室で、菊池川下流域では初めて確認されたものです。

このうち、2基には副葬品の一部が残存していました。滑石製の玉類、ガラス玉といった装飾品、鉄鏝や刀子などが出土しています。

トピック展示

玉名高校考古学部の発掘品

近年、県立玉名高等学校の校舎が改修されることとなり、これまで図書館に陳列されていた遺物が、市の収蔵庫へ移管されました。現在、同校からの寄託資料となっていますが、戦後に創設された考古学部の部員たちが発掘したものです。今回、その一部である須恵器を紹介しています。

高度経済成長期には開発が増加し、多くの遺跡や古墳が消滅するなか、部員たちは市内や県内の発掘に携わり、文化財保護に努めました。



玉名高校考古学部が発掘した須恵器

古代の寺院と水田開発

たまの古代

立願寺廃寺

奈良時代になると律令制度が確立し、地方には郡単位で官衙施設や寺院が建立されました。当廃寺は、中世期に大幅な改変や礎石の廃棄が行われているため、正確な寺院の配置などは不明確となっています。令和6年度の調査では、北端で溝状の落ち込みが確認され、平成12年度の調査区でも東西方向に溝が検出されています。

これらの溝から北側は谷になっており、遺構は検出されないことから、寺域の北端を示す境界のような溝ではないかと考えられます。北側の調査区では廃棄された瓦や須恵器が出土しました。



寺域の北側に廃棄されていた須恵器や瓦



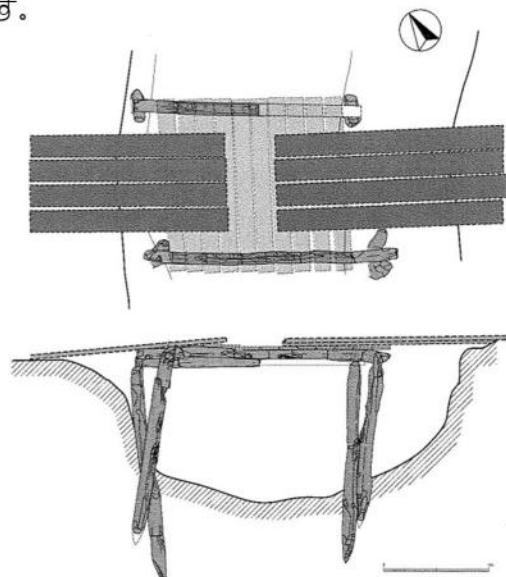
玉名平野遺跡群

菊池川右岸の平野部に広がる低湿地遺跡です。平成30年度に、くまもと県北病院建設地で発掘調査を実施したところ、平安時代末期の水田跡(17区画分)と共に水路が検出され、その一部に木橋が残存していました。木橋は長さ約2.5m、幅約1.5mを測り、県内で初めて発見されたもので、全国的にも類例の少ない遺構です。

Y字形に枝分かれした部分を利用した4本の柱に、平行に2本の桁材を渡した構造で、それに板を載せて橋としていたようです。通常の農作業用というよりは、主要な道に架かる橋であった可能性もあります。令和6年度から7年度にかけて木材の保存処理が完了したため、その一部の部材を展示しています。



県内初の発見となった木橋



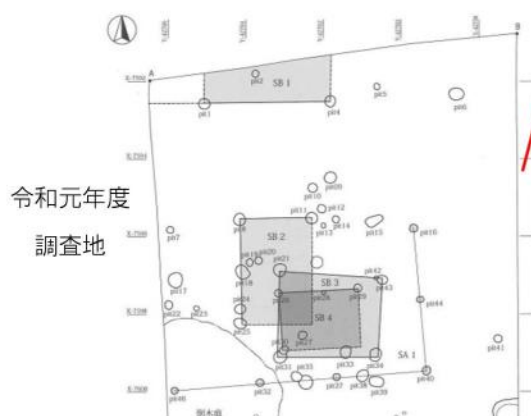
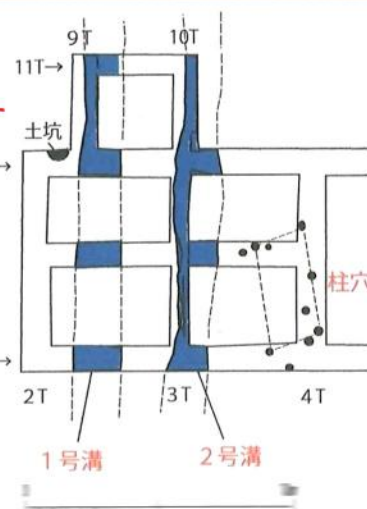
木橋の復元図

中世の城館と信仰・祈り

たまなの中世

春出遺跡（中村館跡）

当遺跡には、大野氏に関連する居館跡があり、市街地の中にわずかな痕跡を留めています。これまで、土塁や堀の跡が確認され、令和元年度の発掘調査地では、掘立柱建物跡4棟とそれを囲むような柵列跡が検出されています。近年の調査では、南北方向に平行する2条の溝と、その東側に納屋とみられる建物跡が確認され、土師皿や滑石製鍋と共に南海産の大型貝（シャゴウ貝）が出土しています。



土師皿・滑石製鍋



クマサルボウと南海産のシャゴウ貝

高道城跡

令和7年に市内で発生した線状降水帯の影響によって、高道天満宮境内（本丸跡）が陥没しました。緊急調査を実施したところ、地下に戦時中の防空壕があり、その空洞が陥没の原因であることが判明しました。また、断面から城跡に伴う土坑が検出され、土師皿が出土しています。当城は、大野一族が築いたとされ、その後、小代氏との戦いによって落城します。ここは最後の砦となって大野氏滅亡の舞台になったといわれています。



土坑状の遺構(下部は防空壕跡)



出土した土師皿

蛇ヶ谷製鉄跡

小岱山麓は砂鉄が採取できるため、古代から中世にかけて、たたら製鉄が行われてきました。

この製鉄跡は昭和27年に発見され、玉名高校考古学部を中心に発掘が行われましたが、山麓にあるため、遺跡の正確な場所がわかっていませんでした。近年の踏査で、ふいご羽口や鉄滓が採集され、製鉄跡の位置が判明しました。



採集した鉄滓とふいご羽口



昭和27年の調査写真

山田白山十二坊塔碑

山田日吉神社一帯は、中世になると天台宗による白山信仰の拠点となる地域になりました。修行をする場所や宿舎があった十二か所の坊跡には、現在も信仰の対象となっている石造物が祀られています。これらを保護するために覆屋を新設する工事を行いました。その際に確認調査を実施し、祭祀的な土師皿や土製品が出土しています。



覚満坊塔碑とその下部から出土した土師皿



整備前の俊教坊塔碑



大力坊跡出土の土師皿



俊教坊跡出土の硯形土製品

トピック展示

え な つ ぽ 胞衣壺

岱明町野口に所在する塚原遺跡と木船西遺跡は、市道建設に伴い発掘調査を行いました。弥生時代から古墳時代中期を中心とした遺跡ですが、古代末から中世の遺構も検出されています。これらは、「胞衣壺」とみられ、人の胎盤である胞衣を容器に入れて埋納したものと考えられています。生まれた子どもの健やかな成長や立身出世を願い、胎盤を埋納するという風習は古くからあり、地域によっては現在も行われている所もあるようです。



塚原遺跡出土の胞衣壺



木船西遺跡出土の胞衣壺

トピック展示

むかしの人も SDGs?

築地にある浄光寺跡の土壌墓から出土した滑石製の石鍋で、一緒にかわいい手鏡のような石製品も出土しています。石鍋は平安から鎌倉時代を中心に使用された煮沸鍋で、産地は長崎県の西彼杵半島と判明しています。しかし、このような小さな製品は用途不明とされてきました。近年、出土事例が増えたことで、欠損した鍋の部分の補修するための製品であることが明らかにされました。この鍋にも、実際に一部の欠損があります。類例は、西北九州を中心に約200か所で確認されていますが、浄光寺跡出土品は完全な形で埋納されていたため、高い評価を得ています。



浄光寺跡出土の滑石製鍋と補修具

高瀬御蔵と庶民の生活

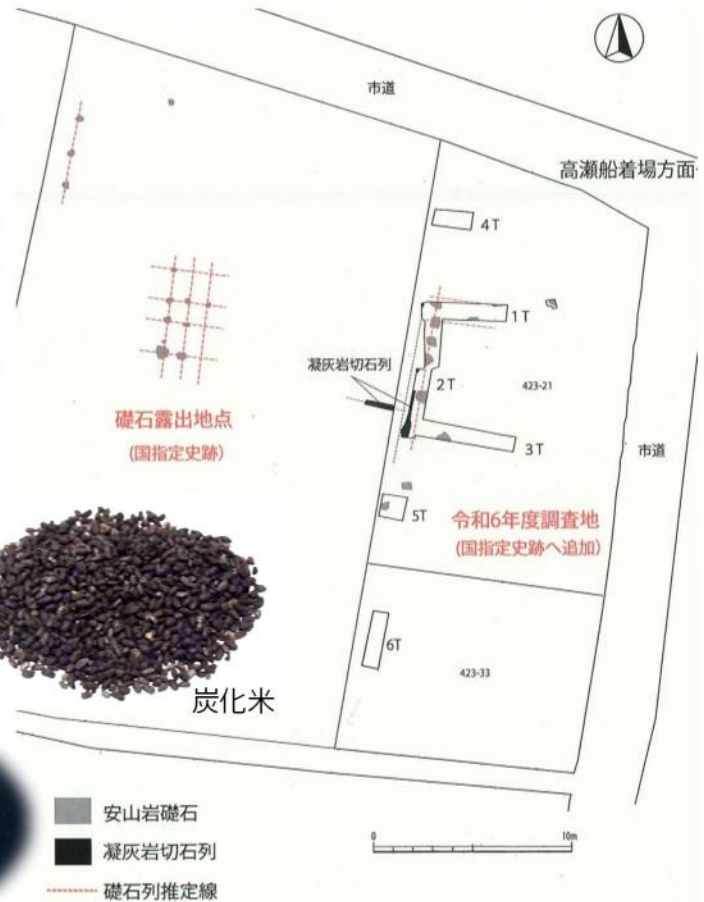
たまなの近世

高瀬御蔵跡（国史跡・熊本藩高瀬米蔵跡）

江戸時代、高瀬は肥後五ヶ町の一つとして栄え、藩営の米蔵がありました。菊池川沿いには船着場（俵転がし）も併設されています。残念ながら、米蔵は明治10年の西南戦争で焼失し、焼けた瓦や炭化米が多量に出土しています。以前から礎石が露出していた敷地は国史跡となっており、その東側隣接地を令和6年度に調査したところ、同様に安山岩の礎石列が確認されました。礎石が焼土層にパックされて残存していることが判明したため、追加指定されています。



高瀬御蔵跡の礎石列と西南戦争で焼けた瓦



覺眞寺

片諏訪に所在する寺院で、本堂は寛政年間に建てられましたが、老朽化のため解体されていました。新築工事に伴い、確認調査を実施したところ、旧本堂の基礎跡が東西方向に並んで検出されました。礎石は撤去してありましたが、その下部に礫石を埋め込んだ穴（地業の痕跡）が確認され、古銭などが出土しました。古銭はいくつかの基礎部から検出されたため、地鎮の意味があったものと考えられます。



覺眞寺で検出された旧本堂の礎石跡

築地館跡

調査地は、築地にある中世の居館跡の一角です。近年まで大きな屋敷が建っており、敷地の端には江戸時代以降のゴミ穴が掘られていました。日常生活で使用され、割れた食器などは廃棄されており、様々な陶磁器類がありました。碗、皿などは、5点以上のセットがあったとみられ、花瓶、徳利、キセルなどもありました。まるでタイムカプセルを開けたようで、当時の庶民生活の様子が浮かび上がってきます。



築地館跡で出土した近世磁器

近代化の波、そして戦争へ

たまなの近現代

築地館跡

明治時代以降のガラス製品も多量に廃棄されていました。主に、昭和前期の薬、化粧、飲料、インク瓶などで、駅で販売されていた牛乳瓶もありました。様々な種類があり、色も茶、青、緑と鮮やかです。当時はゴミでしたが、こうして見るとレトロ感にあふれ、現代でも美しい輝きがあります。



築地館跡で出土したガラス製品

高瀬製造のラムネ

これは、明治41年頃に高瀬の保田木にあった「久米清商会」が製造販売していたラムネの瓶です。当時、コレラなどが流行し、炭酸飲料は胃腸に効くとされ大流行しました。赤十字社にあやかってか、十字マークが陽刻されており、一時は高瀬の特産品となっていました。



防空壕跡（高道城跡）

令和7年に発生した線状降水帯によって陥没したため調査しました。証言の通り、戦時中に掘られた防空壕が地下にあることが確認されました。幅約1.8mで、コの字型に掘られていますが、北側は別の壕と合流し、さらに続いていたことも判明しました。高道地区の人々が掘った地域の防空壕で、戦後に埋められていました。



高道城跡で検出した防空壕跡

大浜飛行場跡のレンガ塀

昭和19年に、陸軍太刀洗飛行学校の「玉名教育隊」が開隊し、大浜に飛行場が造営されました。戦後80年を経ても、正門や風呂場、大型格納庫などの一部が残存しています。また、集会所跡とされていた敷地には、門柱とレンガ塀が残存していましたが、宅地造成に伴い、撤去されることとなったため、調査後に移設しました。

レンガは、砂とセメント、鉱滓を混ぜて作られたもので、炭鉱施設などにも使用されているものでした。このレンガは門柱の内部にも積み重ね、モルタルで仕上げられていることがわかりました。



集会所跡の門柱とレンガ塀(移設前)

覺眞寺で発見された砲弾

片諏訪にある寺院で、令和7年度の調査の際に境内で砲弾が発見されました。住職への聞き取りでは、「詳しくはわからないが、ずっと前からここにあった」とのことでした。

近くの伊倉や大浜なども被害を受けた西南戦争や太平洋戦争時のものと思われましたが、寺院横に「日露戦争記念碑」があったことから、日露戦争のものである可能性が浮上しました。地元から出征し、凱旋した人が記念に持ち帰ったものと推測されます。当時は、神社や寺に戦利品などを奉納するという習慣があったようです。この砲弾は、長さ約20cmで、中の信管は抜かれていました。



日露戦争に由来する砲弾

ふるさと玉名のモノがたり...
おしまい、おしまいだにゃん。

